

〔研究ノート〕

スタディスキル I 授業報告2019

The Report on “Study Skill” 2019

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健・音 成 陽 子・池 田 祐 子・片 山 富 弘
吉 川 卓 也・朴 晟 材・前 田 卓 雄・明 神 実 枝

1. はじめに

中村学園大学流通科学部では、1年前期に必修科目として「スタディスキルI」という科目を実施している。「スタディスキルI」は流通科学部に入学した新1年生を対象とする初年次教育科目として、大きな役割を果たしている。その教育目標は次の通りである。

- ①高校生活から大学生活へ順調に移行するための心構えを知り、新しい仲間との親睦を図る。
- ②高校時代の受動的な学習ではなく、大学では興味を持った分野を自ら追求する能動的な学習が必要なことを実体験し、それに必要なスキルを身につける。
- ③流通科学部のカリキュラムに対する理解を深め、そのために今何をやるべきかを考える。

2. 授業概要及び授業計画

まず、「スタディスキルI」の授業概要及び、授業計画（15回）を示す。

授業は、①小教室での各指導主任による教室単位の講義及び演習と、②大教室での講師による全体講義及び③授業時間外の図書館ツアーからなる。①は、各クラス単位での指導主任による自由な講義・演習を行うが、数名のグループ単位でテーマを決め、自ら調査し、互いに報告しあい、意見を交換し、レポートにまとめるといふグループ学習と、講義をノートにまとめ、新聞や書籍等から補足情報を収集する各人の個

人学習を通じて、大学でのスタディ・スキルを習得する。②は、履修やTOEIC試験、海外研修についての講義を行う。

③は、1回だけ別途時間を指定し、30名単位での図書館ツアーを行い、図書館の利用方法を学ぶというものである。

各回の授業内容は、以下の通りである。

- 第1回（小教室）プレイメントテストの実施
- 第2回 ガイダンス
 - ・個人票の作成
 - ・クラス委員長を選定、自己紹介など
 - ・個人面談
- 第3回 図書館ツアー（担当：図書館）8回に分けて行うため、実施時期はクラスにより異なる。
- 第4回～第5回（小教室）三角ロジック・ブレインストーミングの演習を行い、論理的思考を身につける。
- 第6回～第7回（小教室）各指導主任がテーマを決め、クラスごとに講義を行う。
- 第8回～第13回テーマ授業 各指導主任がテーマを決め、クラスごとに交代しながら、講義を行う。
- 第14回（大教室）①TOEIC試験の説明と海外研修の紹介。②海外スカラシップ制度の紹介。
- 第15回（大教室）今後の履修に向けて教務上の注意を行う。

まず、全体のプログラムとしては、第1回の履修指導、第2回のプレイズメントテスト、第3回の図書館ツアー、第14回の① TOEIC 試験の説明と海外研修の紹介。②海外スカラーシップ制度の紹介、第15回の今後の履修に向けての教務上の注意がある。

まず、プレイズメントテストについて述べる。プレイズメントテストは、高校までの基礎的学力を問う試験で、英・数・国で実施した。この点数の低かった学生については、昨年度と同様、基礎教育センターにおいて、補講を受けることを義務づけた。プレイズメントテストの成績と一学年における成績、補講の実施の効果、などについては、別途に報告する。

その他「スタディスキルⅠ」の特色として挙げられるのは、第8回～第13回に実施したテーマ授業である。各指導主任は、1時間ずつ順番にローテーションを組んで、それぞれテーマの授業を各クラスで順番に行っていく。そして、そこでテーマに基づいた課題を行い、そのレポートの作成を学生に課す。したがって、各教員は、テーマ授業を各クラスに対して回6回繰り返すことになる。また、第3回のところで予定している図書館ツアーに関しては、全学年が一度に行うことができないので、テーマ授業と共に各クラスで順番に行っていく。さらに、各教員が指導主任を担当するクラスに対しては、ローテーションで行ったテーマ授業の他に、第4回～第7回にそれぞれ独自のグループ学習を行った。

評価方法は、①テーマ授業に関するレポートの内容、②グループ学習報告と最終レポートの内容、③出席状況及び積極性等を総合的に勘案することとした。テーマ授業の内容を各10点として、各教員に採点してもらい（計70点）、クラス単位のグループ学習の点数を30点として、それに加えた。そこに、出席状況及び積極性等によって加点・減点を加えた。特に、プレイズメント試験において、低得点だった学生に対し

ては、基礎教育センターにおける補講を必修として、その出欠を点数に反映させた。

【三角ロジック】

①と②は、同じ〈事実〉から異なる〈主張〉が導き出されている。

同じ〈事実〉から異なる〈主張〉が導き出されるのは、〈論拠〉が異なるからである。

では、①②のそれぞれの〈論拠〉とはどのようなものか。

靴のセールスマンが、熱帯雨林の土地を探検して誰も靴を履いていない村を発見した。

①この村の人々は、誰も靴を履いていない〈事実〉→この村では靴は全く売れない〈主張〉。

②この村の人々は、誰も靴を履いていない〈事実〉→この村では靴はたくさん売れる〈主張〉。

三角ロジックの説明

【ブレインストーミング】

グループ活動として、大学生活におけるイベントと①やるべきこと、②やりたいこと、③知りたいこと・わからないことを学年・学期ごとに書き出し、表にする。その後、作成した表についての発表と質疑応答やディスカッションを行う。

【図書館演習】

図書館の方による館内ツアー後、流通科学部での学びに関連するキーワードから、蔵書検索を行い、本の抜き書きを行う。

【テーマ授業の例】

●福沢健 吉見俊哉「ディズニーランド」を読む
大学の勉強の意味と、必要な技能（読解力・要約力・思考力）とを考えてもらうために、「ディズニーランド」を例にとりてワークショップを行った。

東京ディズニーランドの地図、北九州スペースワールドの地図を配布して、両者の違いをグ

ループごとに討論して、発表させた。

次に、吉見俊哉「ディズニーランド」を読ませて内容を要約させ、そこで、自分たちが漠然と考えていたディズニーランドの特徴は、「インターラクティブ性」「三次元のアニメーション」という明確なコンセプトに基づいて作られたものであることを認識させた。ここで、大学の勉強とは、理解できないような難しい理論を覚えるものではなく、自分たちが漠然と感じていたもの、感覚的に捉えているものについて、論理的に説明するものであることを強調した。また、ディズニーランドの特徴については、他の立場からもさまざまに説明されていることを述べたうえで、大学の勉強とは一つの結論を覚えるものではないということも述べた。

レポートは、吉見の論文を踏まえて、ディズニーランドと他のテーマパークとの違いをまとめさせた。

●音成陽子 授業テーマ：「毎日できる健康チェック」

I. 授業のテーマ：「毎日できる健康チェック」

日々の生活において、自分自身の健康状態を良好に保つことは重要である。そこで、本授業では毎日、簡単にできる健康チェックについて理解し、実践につなげる。

II. 授業内容

1. 脈拍数をはかる

1) 脈拍数 ①自分ではかろう ②友達にはかかってもらう

2) 脈拍の正常値

- ・ 1分間に60～80(100)拍/分(安静時)
- ・ 男性より女性の方が多い傾向にある(男性65～75拍/分、女性70～80回拍/分)

3) 不整脈とは

- ・ 頻脈：100拍/分以上
- ・ 徐脈：60拍/分以下
- ・ 期外収縮(リズムが一時的不規則)
- ・ 不整脈の原因：疾病、過度のストレス、過労、睡眠不足、環境の変化、加齢、体質
- ・ 病院へ行くべき症状：動悸、めまい、冷や汗、吐き気、息切れ、胸痛

2. 立ち上がりテスト(下肢筋力を評価する)

ロコモ度チェック(日本整形外科学会 ロコモチャレンジ!)の一つである。歩行に必要な膝伸展筋力は両脚20cm、片脚40cmに相当するとされている。

①両脚立ち 20cmにチャレンジ

肩幅に足を開いて座り、反動をつけずに立ち上がり、3秒保持します。

②片脚立ち 20cmにチャレンジ

左右どちらかの脚を上げたまま、反動をつけずに立ち上がり、3秒保持します。

表1. 各年代での立ち上がれる台の高さの目安
(50%の人が実施可能である高さ)

	男性		女性	
	片脚	両脚	片脚	両脚
20～29歳	片脚	20cm	片脚	30cm
30～39歳	片脚	30cm	片脚	40cm
40～49歳	片脚	40cm	片脚	40cm
50～59歳	片脚	40cm	片脚	40cm
60～69歳	片脚	40cm	片脚	40cm
70歳以上	両脚	10cm	両脚	10cm

3. 課題) 各測定の結果を UNIPA に入力して提出

●池田祐子

池田【『ALC NetAcademy Next』の活用について】

流通科学部スカラーシップ留学制度や就職試験において、TOEIC テストが英語の資格として活用されていることを説明の上、e-learning 教材『ALC NetAcademy Next』(TOEIC L&R テスト 500点突破コース)の進め方と進捗状況の確認を行った。また、NEXT の学習機能をデモンストレーションすることで、英語力を向上できる自己学習方法を講義した。授業には株式会社 ALC より NEXT 専門の講師を招き協力を仰いだ。

e-learning は学生によって進捗度に大きな差が生じるため、直接指導の機会があることは非常に有効であった。N ノートの配布により、このような形の授業が可能になったと言える。以下は e-Learning の年間スケジュールである。

◇ e-learning 学習 ◇

【前期】★課題コース：500点突破コース 進捗率90.4%で100点

★受講締切日：7/29 (月)

【後期】★課題コース：600点突破コース 進捗率92.5%で100点

★受講締切日：1/20 (月)

※上記進捗率は模試(フルサイズ・ハーフ)を除く、サブコース(Stage1・2・3、Review)をすべて終えたときの進捗率

◇ TOEIC ハーフ模試実施 ◇

【前期】★模試種類：TOEIC (R) L&R テスト 500点突破コース

JT03 TOEIC LISTENING AND READING TEST ハーフサイズ模

擬試験 (1)

★受験期間：5/7 (火)～5/13 (月)

【後期】★模試種類：TOEIC (R) L&R テスト 500点突破コース

JT04 TOEIC LISTENING AND READING TEST ハーフサイズ模擬試験 (2)

★受験期間：1/6 (月)～1/13 (月)

◇小テストの実施◇

【前期】受験期間：1回目 6/3 (月)～6/9 (日)

※500点突破コース Stage1.2から出題

2回目 7/1 (月)～7/7 (日)

※同上 Stage1.2.3から出題

【後期】受験期間：1回目 10/31(木)～11/6(水)

※600点突破コース Stage1.2から出題

2回目 11/30(土)～12/6(金)

※同上 Stage1.2.3から出題

※ e-learning の進捗度および小テストの結果は「英語コミュニケーション A」、「英語コミュニケーション B」、「英語コミュニケーション C」、「英語コミュニケーション D」の成績の 20%を占める。学生は小テストに向けて出題範囲を学習し、期限内に課題を修了することが求められる。

●片山富弘

目標：特性要因図を活用して、問題解決を図る訓練をする。

特性要因図：品質管理の分野で用いられる手法であり、特性要因図は、QC 7つ道具の中でも、言語情報を取りまとめる手法として、原因追求型と目標達成型に区分できる。

実施内容：クラスの学生に、QC 7つ道具の1つである特性要因図の作成を実施した。今回は、目標達成型の例として、特性として「流通食堂の満足度を向上するには」として、特性に対する要因としての数多くのアイデアを出させて、図表の作成と報告を行った。特に、

要因については、マーケティング・ミックスの4P (Product、Price、Promotion、Place) や4M (Man、Material、Machine、Method) の観点からの要因項目の洗い出しを考えてもらった。30位の要因項目の中で、特性に対して効果がありそうな要因項目に○印をつけてもらった。また、特性要因図は、特性の内容を変えることで、要因を洗い出すことができることを身近なことに使用できることをも話した。

●吉川卓也

目標 経済学の理論がどのように活用されるかを示し、理論を学ぶ重要性を理解する。

経済学における市場原理を理解することで、時事的問題である米中貿易摩擦を分析、評価できることを示す。

内容 機会費用を計算し、比較優位の原理による分業のもたらす効果を理解する。

機会費用に基づく比較優位の原理による分業について、生産の2人2財モデルで生産効率の上昇を説明し、比較優位をもつ生産に特化し、生産物を交換することで社会的な分業のもつ意味を理解する。さらに交換の場としての市場の役割を説明し、取引相手双方に利益をもたらすことを理解する。国際貿易は基本的にこうした原理により経済的利益を生み出すものであり、関税などの貿易障壁を人為的に設定することは、経済効率を損なうことを示した。

●朴晟材

ロジスティクスを理解する

企業を取り巻く環境要件は、さらに戦略性が求められる方向へとダイナミックに変化しており、多くの企業では革新的なロジスティクスが企業戦略の一つとして組織的・体系的に展開されている。

本テーマ授業では、ロジスティクスの全体的枠組みを紹介した上で、身のまわりの関連活動

を学生自身に発見させることで、ロジスティクスの理論的・実践的展開状況を学習するための視点を討論の中で確認した。

内容：

1. CSCMPにおけるロジスティクスの定義
2. ロジスティクスの高度化
3. 米国と日本のロジスティクスの発展史
4. ロジスティクス概念の生成と企業組織の変化
5. ロジスティクスの領域別区分
6. ロジスティクス活動のまとめ

●前田卓雄

この授業では、日経ビジネス2019年3月18日の36ページから39ページ、及び42ページから43ページに掲載された「ダイナミック・プライシング」に関する記事を読ませて価格決定権は「売る側にある」という視点と「買う側にある」という2つの視点から、学生自身の考えをまとめさせ、レポートとして提出をさせた。江戸時代に三越の前身にあたる呉服商の「越後屋」が行った「正札販売」は、現代まで続く「一物一価」の商いのルーツである。しかしながら、今日では航空業界や旅行業界といったサービス業に代表されるように、繁忙期や閑散期での価格変動が当然のように浸透している。現在のこのような状況下において、価値に見合う価格とはなにか、誰が価格を決めるのか、といった視点から「売手」と「買手」の側に立って考察をすることは、学生にとって、これから経営系の学部において学びを深めていくことへの気づきになったのではないかと考える。ほとんどの学生は、高校時代を社会の仕組みや企業の経済活動について意識することなく過ごしてきたと思われる。したがって、まずは、社会全体に関心を向けて、世の中の動きを意識させることが重要だと考える。採用した記事の中には、価格変動は消費者の理解が得られないとする著名な経営者の意見も併せて掲載されており、様々な視点

から自分自身の考えをまとめ、それを論理的に表現することの難しさもこの授業を通じて経験できたのではないだろうか。提出を求めたレポートの中には、ただ単に記事を要約しただけのものや時間内に記述を終えきれていないものも散見された。これから大学で学びを深めていく上で必要とされる「学ぶ力」とは何かを意識する機会をとらえたと思う。

●明神実枝

テーマを「マーケティング発想の経営とは」とした。そもそも、マーケティングはどのような経緯で誕生した発想法なのか。なぜ、それが重要視されて一つの専門分野を形成するに至ったのか。これを理解し、今後の学習意欲の向上につなげることを目的とした。具体的に、以下の2つの課題に取り組んだ。

課題1：『コカ・コーラ帝国の興亡』の「世紀の大失敗」(392-405ページ)を読んで、①ニューコーラの失敗の原因は何だったか、②コカ・コーラ社はこの出来事から何を学んだか、③あなたはこの出来事から何を考えたか、について回答しよう。

課題2：課題1を踏まえて、身近にあるマーケティング発想の事例(製品・サービス)のリストを作成しよう。

課題1を通して、マーケティングという発想法の特徴と有用性を理解し、課題2を通して、その発想法が実践に結びついている現実を確認できた。

3. 考察

スタディスキルIは、各指導主任によるテーマ授業を行う点に特色がある。テーマ授業の共通の趣旨は、高等学校と大学との接続、特に学ぶための姿勢の違いについて、学生自身に考え

てもらおうというものであった。学生には、さまざまな授業を通して、大学生活において必要なアカデミックリテラシーとは何かを考えていってもらいたいということが、我々スタディスキルI担当の教員の願いである。

最後に、平成30年度の問題点について、令和元年度はどのように改善したか。またその効果はどうであったかという点について述べる。

①平成30年度の問題点としては効果測定を行っていなかったという点があった。令和元年度は、ラーニングサポートセンターの方での効果測定は行ったが、スタディスキルIという授業を通して、学生にどのような意識の変化があったか、またはなかったかをきちんと検証できていない。効果測定のシステムを、特に社会人基礎力との関係から、考えていかなければならない。次年度以降の課題としたい。

③平成30年度・令和元年度に共通する問題として、学生の基礎学力の格差が大きいということが挙げられる。プレイメントテストの導入によって、学生の基礎学力がどの程度かは明らかになった。その結果、プレイメントテストの点数と、学生の理解力・学習態度・意欲・成績の間には、ある程度の相関があることが分かった。ただし、プレイメントテストの点数が低かった学生は、単に基礎学力が不足している場合もあるが、学生相談室のカウンセリングの必要なケースも存在した。ラーニングサポートセンター・学生相談室との連携をさらに深めていく必要があるだろう。

以上、令和元年度のスタディスキルIの概要とその問題点である。今年度から改定した新カリキュラムでは、昨年度までのアカデミックリテラシーをスタディスキルIと名を変え、内容も更新した。この記録を、次年度以降に役立てていきたいと考える。